

NICU 長期入院患児の検討

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅ケアシステムに関する研究)

研究協力者 松 田 博 雄

目 的：新生児・未熟児医療の進歩により、超未熟児をはじめとする重症児が、後遺症を残さずに救命できるようになった反面、従来は救命できなかった児が救命され、長期間NICUに入院し、NICUの機能が十分に発揮できなくなっていると言われている。そこで、長期間NICUに入院している児について検討した。

対象および方法：東京都新生児救急医療ネットワークに参加している17施設に、昭和63年から平成2年の3年間に収容された、入院期間が180日以上長期入院患者を対象とした。対象児は東京都母子保健サービスセンターと17施設との新生児情報ネットワーク、新生児（NICU）入院患者調査票を基にした。

結 果：3年間の180日以上長期入院患児は170名であった。そのうち29名は360日以上入院であった。

180日以上入院した170名の出生体重は、超

未熟児が76名、極小未熟児で97名と57%を占めた。360日以上入院日数では極小未熟児の占める割合は29名中10名34%であった。(表1)

主な診断名は、呼吸窮迫症候群33名、気管支肺異形成42名、先天性心疾患19名、低酸素性虚血性脳症9名などであった。

54名が外科的手術を受けていた。動脈管開存症、先天性心疾患および壊死性腸炎に対する手術が多くを占めた。

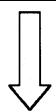
考 案：当院（杏林大学新生児・未熟児センター）の検討でも同様に、180日以上入院は超未熟児の占める割合が多かったが、360日以上入院は奇形と無酸素性虚血性脳症が大半を占めた。本調査は、東京都新生児救急医療ネットワーク17施設の新生児入院調査票を基に検索したため、診断名が十分に把握できていないと考えられる。360日以上長期入院例では、未熟性に基ずく児の占める割合が減少しており、今後さらに詳細に検討したい。

表 1 長期入院患児

weight (g)	入院日数 (日)	
	≥ 180	≥ 360
- 749	41	2
750 - 999	35	6
1000 - 1499	21	2
1500 - 1999	16	3
2000 - 2499	19	5
2500 - 2999	20	4
3000 - 3499	14	5
3500 - 3999	3	1
4000 - 4499	1	1

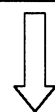
東京都新生児救急ネットワーク

昭和63年-平成2年



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



平成3年度厚生省心身障害研究「新生児期・乳児期の生活管理のあり方に関する総合的研究」

NICU 長期入院患児の検討

(分担研究:新生児・乳児の退院後の在宅ケアシステムに関する研究)

研究協力者 松田博雄

目的:新生児・未熟児医療の進歩により、超未熟児をはじめとする重症児が、後遺症を残さずに救命できるようになった反面、従来は救命できなかった児が救命され、長期間 NICU に入院し、NICU の機能が十分に発揮できなくなっていると言われている。そこで、長期間 NICU に入院している児について検討した。'

対象および方法:東京都新生児救急医療ネットワークに参加している 17 施設に、昭和 63 年から平成 2 年の 3 年間に収容された、入院期間が 180 日以上 of 長期入院患者を対象とした。対象児は東京都母子保健サービスセンターと 17 施設との新生児情報ネットワーク、新生児(NICU)入院患者調査票を基にした。

結果:3 年間の 180 日以上 of 長期入院患児は 170 名であった。そのうち 29 名は 360 日以上 of 入院であった。

180 日以上入院した 170 名の出生体重は、超未熟児が 76 名、極小未熟児で 97 名と 57%を占めた。360 日以上 of 入院日数では極小未熟児の占める割合は 29 名中 10 名 34%であった。(表 1)

主な診断名は、呼吸窮迫症候群 33 名、気管支肺異形成 42 名、先天性心疾患 19 名、低酸素性虚血性脳症 9 名などであった。

54 名が外科的手術を受けていた。動脈管開存症、先天性心疾患および壊死性腸炎に対する手術が多くを占めた。

考案:当院(杏林大学新生児・未熟児センター)の検討でも同様に、180 日以上 of 入院は超未熟児の占める割合が多かったが、360 日以上 of 入院は奇形と無酸素性虚血性脳症が大半を占めた。本調査は、東京都の新生児救急医療ネットワーク 17 施設の新生児入院調査票を基に検索したため、診断名が十分に把握できていないと考えられる。360 日以上 of 長期入院例では、未熟性に基づく児の占める割合が減少しており、今後さらに詳細に検討したい。